

浄土

1976 - 1

昭和十年五月二十日
昭和二十四年四月二十八日
昭和五十年十二月二十五日印刷
（第三種郵便物認可）
運輸省（特別授承認雜誌）第三二五号
昭和五十一年一月一日発行
第四十二卷
第一号



寿



知恩院つとむる



寿に就いて

浄土門主

岸 信 宏

本年の御歌会初めの御題は「坂」と仰せ出されています。人間一代の生活も一つの山坂にたとえることができましょう。三十代から五十代までは頂上に達する活動の時期ですが、六十代の還暦、七十代の喜寿、八十代の米寿は、すでに老の坂を下りつつあるのです。

そこには人生の苦難の山坂をのりこえてきた喜びがあります。私も本年は米寿を迎え、苦難の人生を顧みて、今日あることに深に感謝を捧げざるを得ない喜びをかみしめるのであります。

正月号



△年頭所感▽

目次

御題「坂」に因みて……………	岸 信宏……………(2)
兄弟弟子……………	大 野 法 道……………(5)
法然上人との対話……………	林 靈 法……………(6)
心あらたに……………	高 畠 寛 我……………(9)
今昔物語……………	宮 本 文 哲……………(10)
わかるお経……………	石 井 真 峯……………(12)
現代と仏教の接点……………	平 川 彰……………(14)
ブータンへの道へ……………	佐 藤 密 雄……………(18)
画竜点睛 一辰の年に思う……………	安 居 香 山……………(21)
浄土教の流れへ……………巨大な惑星……………	竹 中 信 常……………(24)
法教術語十二月(一月の巻)……………	宝 田 正 道……………(28)
書の四季(十) 丙辰新春書初随想……………	林 錦 洞……………(32)
(肥後の民話) 竜宮童子……………	内 山 憲 尚……………(35)
念仏ひじり三國志(二十一) 法然上人をめぐる人々……………	寺 内 大 吉……………(37)

表紙 久住 静雄画

カッ ト 大正大学美術部



御題「坂」に因みて

浄土門主 岸きし 信しん 宏こう

昭和五十一年正月御歌会始めの御題は「坂」と仰せ出されています。坂と申しますと、ただ今私の住んでいます知恩院は、東山三十六峰の一つである華頂山の麓にありますので、境内が大きく三段に分れて、坂が多いのであります。上段には宗祖法然上人の御廟と、本地堂と称している勢至堂とがあり、御廟を守護する守廟長以下の人々が起居しています。ここにはまた知恩院歴代住職のお墓や信徒のお墓があります。この御廟へ参詣するの

はかなり急な石段が三十段ほど中央で屈折してあるのを登らなければならぬ坂の上にあるのであります。

またその一区域には権現堂というのがある、知恩院の大檀那であった徳川家初代家康公、第二代秀忠公、第三代家光公を祀っております。さらにまた知恩院の守護神の一つである濡髪大明神という祠があります。これは種々の伝説と俗信とがあり、今も信者の参詣が多いのであります。

中段は広場になっており、知恩院の主要なる建造物がここに建てられてあるのです。宗祖法然上人の御影をまつる大殿をはじめ、丈六の坐像をまつる阿弥陀堂、集会堂、大方丈、小方丈、寺務所、門主の居室、炊事場、大広間の雪香殿などがあり、浄土宗宗務庁も寺務所とならんであります。これら主要な建造物は廊下によって連結されてあります。その廊下の一部分が「驚張り」と称せられ、大殿の軒の垂木にさされてある、いわゆる「忘れ傘」と共に知恩院の七不思議の中に数えられるのであります。この広場には尚独立せる建築物として、宋版の一切経を取めた経蔵、納骨堂になつてゐる多宝塔二基、参詣者の休憩所である泰平亭などがあります。

下段の広い区域は、昔は知恩院の宮門跡の屋敷と山内寺院が立ちならんでいたのでありますが、現在は、宮門跡のあとには由緒寺院としての得浄明院と、大半は知恩院経営の華頂学園となつてゐます。山内の寺院は昔は二十ヶ寺ほどあつたと思いますが、今は十ヶ寺ほどに減少し、右の華頂学園（女子の中学・高校・短大）、華頂幼稚園、華頂会館、平安養育院、京都教務所、尼僧教育の吉水学園、和順会館、駐車場、友禅苑などに転用せられ

ています。

この下段の広場は東山通りに接してゐまして、新門と古門とから境内に入ります。新門を入るとだらだら坂が続き、ゆるやかな石段を十段ほどのぼると三門の前に出ます。この三門は日本の三大門（東福寺・知恩院・増上寺）の一つで、東山華頂峯の緑を背景にした雄大なる景觀は、おそらく日本一であらうと思います。

先年南方のオーストラリアの建築技士が『勅修御伝』の英訳を変んで法然上人に帰依をし、わざわざ日本に渡来し、知恩院に詣で、剃度式を受けたとのこと、お内仏道場で、藤吉慈海師の通訳で式を行なつたことがあります。その時二千遍の日課念仏を授けたのであります。その建築技士は、この三門を眺めて、東山の緑を背景にし建築せられたこの巨大なる山門は、世界でも有数なる建築であると賞讃してゐました。この技士は帰国以來二千遍の日課念仏を欠かしたことがないという手紙を送つて来しました。自宅も日本風の木造建築とし、その写真を添えてありました。

さて、大股でのぼらなければならぬ石段を二十段ほどのぼると三門に達します。三門を通りぬけると前面には

さらに急勾配の大きな石段があります。それをのぼると大殿のある広場に出ます。この三門からの石段の大きくして急なることには、実に驚くのであります。多くの人はこの石段の右側にある、ゆるやかなる女坂おんなさかをのぼるのであります。近年、女坂のさらに南に消防用の自動車道ができたのですが、一般参詣の自動車や団体のバスは通行を禁じられ、三門前の特設駐車場に車をとめなければなりません。

私はこの三門を通過して急坂の石段と、その南側にある一般参詣者に設けられたゆるやかな通称女坂を見る時、いつも難行道、易行道のたとえを思うのであります。この難易二行道のたとえば、竜樹菩薩の『十住毘婆沙論』に出ずるところであって、浄土教の諸師、曇鸞大師も『往生論註』の上に、道綽どうしやく禪師も『安樂集』の上にこのたとえを引いて、一般仏教に説く困難なる修行と、仏の本願他力による浄土門の易修易行の念仏法門とを区別していられるのであります。これの諸師の説によつて、我が宗祖法然上人は『選択本願念仏集』の第一章に「難行道とは即ち是れ聖道門しょうどうもんなり、易行道とは即ち是れ浄土門なり」と示されて、一般仏教を聖道・浄土の二門、

難行・易行の二道に分けて、阿弥陀仏が一切衆生救済のために設けられた四十への本願の中心たる第十八の念仏往生の本願の念仏をば、善導大師の解釈たる「称我名号」により、声を本体とする「念声是一」の易修易行の念仏一つをもつて、浄土宗という一宗を開かれたのであります。

古門の方は東山通りより少しく東に入り、白川にかかった石橋を渡つてすぐのところにあります。この古門を通過すると、だからとしたのぼり坂になり、両側に山内の寺院が並び、今は華頂学園が広い区域を占めていたのであります。このゆるい坂道をのぼりつめたところに黒門くろもんという頑丈な門があります。古来知恩院への出入はこの門を通過したのであります。ゆるい石段が続いて、三曲りして庫裡の門につくのであります。曲るごとに石垣と塀とがあり、一番上の塀にはのぞき窓がついています。丁度その構築は城廓のようであります。徳川幕府が一朝京都に事変が起きた場合には、この知恩院全体を幕府の根拠とする構想のもとに建築せられてであると伝えられているのであります。

人生もまた一つの山坂にたとえられます。私もすでに

本年は老の坂をのぼりつめて、老寿の齢を迎えたのであります。願れば悲喜ことももの人生でありました。しかしもう私の人生も下り坂であります。深く反省を重ねてお念仏一つをたよりとして余生を送らして頂く毎日であります。

私は本年の御歌会始めの御題「坂」を拝して、正面の三門を通つてのぼる巨大なる石階の急坂と、傍らに設けられたゆるやかなる女坂の構築を眺めて、つくづくと淨



兄弟子

土門に教ゆる難易二道の教えによって、易修易行の称名念仏の教えの尊さに心を打たれて、次のような漢詩七絶を口ずさんだのであります。

掩映三門緑樹繁
 居然開拓淨乾坤
 坂分緩綫兩般在
 一路同通古紺園

(三門を掩映して、緑樹繁し)

(居然開拓す、淨乾坤)

(坂は緩綫を分つて、兩般在り)

(一路同じく通ず、古紺園)

大本山増上寺法主

大野の法道

私の兄弟弟子は七十一人あります。師匠は三重県松坂市の樹敬寺の大野法音師であります。師匠は明治二十四年の松阪大火のため焼けてしまった本堂再建のため、招

かれて小浜の済渡院から転住して来られました。そして日夜再建のためと布教に専念しておられました。殊に布教に熱心でありましたが、また弟子の養成に尽

力されました。布教に出かけられた時に在家の人から、私の子供をお弟子にして貰いたいのです。お願いします。

といわれると、即座に承諾して、私の寺へよこしなさい。

と申して、つれて来られました。

師匠は焼け跡の清掃に熱心で、草の生えるのをやかましくいわれ、草取りの掃除を弟子たちに命じておられました。そのように厳格でありましたが、同時に他面、非常に温情に満ちたところがありました。寒い夜など近く

の寺へ布教に出かけられる折、お伴をして行く時、ご自分の手を衣の袖に、弟子の手と一緒に包みくるんで温めて下さることがありました。

そんなわけで、いったん弟子にして貰った者は、皆よくなつて育ちました。

明治時代には宗門の一部に、こんなことがいわれておりました。同じ樹敬寺から出られた山下現有大僧正が、弟子の数では第一位、師匠が第二位であるとのことでした。

法然上人との対話



大本山百万遍知恩寺法主

林 はやし

霊 れい

法 ほう

一月は寒い時期である。寒さが身にしむときである。

私は生来から冬がすきである。夏の暑いのはとてもにが



手である。その寒い冬の中でも、この一月というのは、私自身にとっては毎年自分のからだか、おのづからしまる日々である。

それはまことに不思議なことだと自身に思っている。そのわけは、この月にわが法然上人がおなくなりになったという、この強い意識から来るものであった。

法然上人の新宗教に向って、迫害がようやく表面化して来たのは、法然上人が七十二歳のことであった。

南都北嶺の無道な乱暴が実を結んで、遂に七十五歳の老邁の身で四国への追放を受けられた。やがて、恩免は受けられたが、直ちに都に還ることは許されず、勝尾寺でしばらく滞在、漸くに京洛に入るを認められたが、長年にわたる処遇は、年老いた白眉の老師にとつては過酷なものであったろう。その上、京洛における念仏伝道の道も、旧仏教からの巻きかえしによって、必ずしも安泰のものではなかっただろう。おそらくの有数の高弟たち

は夫々の追放を受けてしまったあとだから、念仏教化の信者や道場というものは、散りじりになっていったことだろう。そのような旧都に年老いて唯ひとり帰り来られた法然上人の心境は、どんなに複雑なものであったのだろう。

私はこの七十二歳に始まる念仏門に対する旧仏教からの迫害から帰洛されて、建暦二年正月のご西化にいたるまでの法然上人のご心境について、人間としての、おそらくは苦しいお言葉をききたいと思うたが、それはのこされてはいない。

ただ受けとることのできるものは、ご流罪を恩寵としてありがたく受けとっておられること、そしてまた、浄土はわが本国なりという、まことに宗教者としては、すみ切ったご心境のお言葉だけである。

○ ○ ○

私はゆえあって、若き日、三十を少しすぐるころ、東京の留置場や巣鴨の未決房に二年ほどとじこめられた。暮れから正月にかけて、しもやけやあか切れを手足に受けて苦しんでいたあとき、私は雑居の留置場や拘置所

の独房の中で、法然上人晩年のご苦勞のお姿を思い浮べて、崩れ落ちようとする自分の心をたて直し、たて直していたのである。それは私ごとき若輩のものにとつて、偉大なる法然上人に対しては、まことに無礼な思いを寄せていたことにもなるうか。しかし、それが何といつても、そのときの私にとっては、実に大きな心の支えとなつていたので。

この世で正しい言葉を訴えれば、世俗の連中からは必ず反対が、迫害が来るのである。法然上人を見よ、日蓮上人を見よ。そしてイエスの生涯を見よ。迫害が来るのは己れの説く言葉の正さを物語るものである。法然上人の迫害をすべての恩寵として受けとられし宗教的姿勢を学ぶべしと、私の心には大きなさとしとして、また勇氣として受けとられていたのである。

そして、わが本国は浄土である、とのすみ切ったお言葉は、まことに尊く感ぜられていた。しかし、このお言葉はなかなか実感としては受けとれてはいなかった。信仰の未熟な私には、ただそのお言葉は羨しき限りのものとして聞えていたのである。

宗教者は一度は徹底してこの現実を否定すべきであ

る。だのに無明長夜の執着は、なかなか絶ちがたきものがあつて、到底に浄土はわが本国なりとは言いがたいのである。しかし、わが本国を浄土にもつ人にして、はじめてこの地上のいかなる迫害にも堪えて生きることができるとし、信仰の戰士として、その闘いを最後まで全うすることができたらう。

○ ○ ○

京都の正月はまことに底冷えのする寒さである。百万遍の大伽藍はこの寒々とした冬寒に、美しくしっかりと屹立している。

大殿の正面には、四十三歳の法然上人の勇氣にあふれた御姿の像が、八百年の間座りつづけていられる。この本山で、寒々とした大きな建物の中で正月を迎えている。

しかしそれはわが師法然上人とご一緒している。

まことに寒さの中に、実に身のしまるような厳肅な正月なのである。境内を歩くとき、大殿への廊下を踏みゆくとき、私はこの寒さの中で法然上人と對話をつづけているのである。



心あらたに

大本山清浄華院法主

高 たか
畠 はた
寛 かん
我 が

新しい丙辰の年を迎えまして、まことにめでたく存じます。我が宗も数年の後には、善導大師の千三百回忌、元祖法然上人の御誕生八百五十年を迎えることとなり、前途多事であります。われわれも心を新たに、それに応ずる心構えをもって、これに対処せねばならぬと思います。

私は新年を迎えるときに憶い起すのであります。今から四十余年前、欧州の旅の帰途、インドの仏跡参拝を大體終りまして、カルカッタに滞在しましたとき、親切な方の勧誘により、近く元旦を迎えるので、早速、ダージリンのタイガーヒルからヒマラヤ山脈にさしのぼる旭光を拝することになりました。その前々夜、カルカッタから登山列車に乗り、翌朝、ダージリン着、その日、知人

の紹介にて英国人のお宅に泊めて頂きました。翌朝午前三時起床、その家の奥様の御厚意にて、熱いコーヒーを魔法瓶に入れて頂き出発しました。同勢数人と共に、暗がりの中を、十町余り歩み、昭和四年一月一日早晩、タイガーヒルに到着、日の出を待ちました。寒さ、冷たさは予想以上に厳しく、英婦人が用意して下さったコーヒーを皆で分け合うて頂いたときの暖かさ、甘さは今にも忘れることはできません。かくて輝き出する旭光に夜も明け、我が心も明けて見渡す限りのヒマラヤ山脈連峯の遙かに広大な雄姿、幽幻なる威容、あたりに人なく、家なく、太古に似たる境地に私はいたく感に打たれました。釈尊が菩提樹下において、成等正覚されしとき、天地に拝し、天地に帰投し、合一されしときのお気持の幾

分をも、我が小なる心に感じました。エヴェレスト高峯を含む茫洋たる雪山の容姿に私はぬかずきました。

仏教原理の一即一切の精神、一切衆生を包容する如來の大慈悲の心は、この偉大なる背景によりてますます光

り輝くでありましょう。近く善導大師のご年回を迎える我らは、大師の念仏大悲心に基づく元祖大師の選択本願称名念仏の教えをどこまでも広く伝えねばならぬと思います。



今昔物語

大本山善導寺法主
宮本文哲

題の「今昔物語」は、いささかおおげさな表現とは思
うが、この物語は「人生僅か五十年」といわれた明治時
代と、「人生七十二歳」にまで延びた現代とをつなぐ話
だから、これぐらいのオーバーはあっても、ゆるされる
と思う。

閑話休題

老僧は明治二十一年生れだから、本年八十八の米寿を
迎えた。それで今から六十四年前、すなわち明治四十四

年に厳修された宗祖法然上人の七百年御遠忌にも、また
昭和三十六年に挙行された七百五十回の御遠忌にも、さ
らにまた昭和四十九年に厳修された浄土宗開宗八百年記
念慶讃法要にも、共に知恩院に参詣して祖徳を仰いだの
である。

以上の如く度々法縁に恵まれた老僧には、その思い出
も種々様々たくさんあるが、以下はその思い出の一端で

ある。

以上述べた三大法要の中、明治四十四年に厳修された七百回御遠忌の時は、老僧はまだ東京巢鴨の宗教大学（現大正大学の前身）在学中であつたので、時の教授荻原、椎尾、矢吹等々の当時の学界に令名を馳せた諸先生に引率されて、知恩院に参詣した。

遠忌局から参列者心得が通達されていたが、それによると参列者はすべて「円頂、無髻のこと」とあつたので学生はもちろん教授に至るまで、頭を円めるやら、髻を剃るやら、それは大変なことであつた。

学生の服装は黒衣に輪袈裟。法要中の座席は御影堂の外陣、あの広い堂の中で二時間以上も座らされたので、足は痛いし、寒くはあるし、少々まいったことを、今でも覚えてゐる。

法要が終ると学生は案内役に早変わり、服装が粗末なのと、一見蔵が若いのでぼつと出の小僧に間違えられ、地方から来た団参の信者から「ちよつと小僧さん、これは……」とか、「それは……」とか呼びかけられたことが度々あつた。今の御門主貌下も、あるいはその中のお一人であつたかも知れない？。

次に七百五十年御遠忌の時は、老僧はハワイ浄土宗開教区総長として、参拝団を引率して堂々（？）と登嶺したので「ちよつと小僧さん……」はまぬがれただけでなく、知恩院当局から厚くもてなされた。

次は昭和四十九年四月三日より举行された「浄土宗開宗八百年記念慶讃法要」である。この法要で老僧は四月四日午後一時より、開白の連夜法要の唱導師を奉仕した。左右に脇導師二人を列べ、数百人の大衆に囲まれて、御影堂の大師宝前で表白文を奉読したのである。これ真に老僧一代の感激であり、光榮であつた。

当日老僧の身に着けた七条は、恩師英譽玄哲上人の形見の袈裟であり、伴れた若和尚は恩師の愛孫小田恭寿君で、老僧の師藉津々見長泉寺の現住である。

回顧するに、今を去る六十四年の昔、知恩院の大殿で「ちよつと小僧さん……」と呼ばれた老僧が、その後数々の勝縁に恵まれて、大本山善導寺六十二代の法主となり、夢にまで見た総本山知恩院の大殿で、唱導師を勤めさせていたかどうかとは、何という有難い法縁かと、ただただ宗祖の鴻恩を感謝し、恩師の慈訓に泣きぬれて、報恩感謝のお念仏をさせていただいたのである。合掌。



わかるお経

大本山光明寺法主

石^{いし}井^い真^{しん}峯^{ほう}

一
開宗八百年を記念して各地の寺院で本堂、庫裡、鐘楼その他いろいろな設備の新改築が行われたことはまことに喜ばしい。今後の問題は、これらの設備をいかに生かすかということにかかっていると思う。これを利用して教化活動をさかんにすることが、何よりも大切だと考えられるが、教化活動といっても日常の法要を、いかに生かしてゆくかということが先ず問題になると思う。結論からいうと、法要のお経が参列者にわかるものであり、仏教の教えや浄土宗の大意が少しでもつかめるものであって欲しいことである。

九大名誉教授の佐藤敬二先生が、「お経というものは判らぬものだ。だから有難い。そんな時代は過ぎ去った。と私は思う。『物』におぼれて『心』を見失った現代の青少年に『心のよりどころ』を与えるためには、日本の仏教は、もっと解り易い教典を用意する必要があるのではないだろうか。いまだき聞いて解らないのはお経ぐらいと、素人の私には思えるのだが。識者のご教示を乞いたい、と書いておられる。(昭和五十年十一月号『大法輪』鉄笛)

二

昨年の秋、親戚の者の納骨式が、東京のあるカトリックの教会で営まれ参列した。牧師は若い人だったが、和

文の聖典を見ながらわかる話をされ、三回ばかり讚美歌を歌った。参列者の机上には讚美歌集が用意してあって、番号をいうからすぐわかり、私は信者の人の歌うのを聞いていた。

やはり昨年のことだがA宗の立派な寺院で親戚の者の年忌法要があつて参列した。導師ほか十人ばかりの出動僧で実に立派な法要だったが、経本の備えつけもないので、何を讀んでいるかわからず、法要後一語の法話もなく、物足りなさを感じた。同じ頃B宗の法要にも参列した。経本は備えつけてあつたが、漢文の経本でどこを讀んでいるのかさっぱりわからず、讀んでも意味を理解することなど、とてもできなかった。

三

私は静岡教区の寺院住職時代、教区教化団長の委嘱を受け、数人のものと和文の勤行式を編集した。もとより二、三の和文経本を参考にした。私はその勤行式を法要にも、葬儀にも使用した。今でも一部で使われているのではないかと思う。この経本には増上寺蔵版の和文一尊札を入れ、楽譜も巻末につけた。さらに宗歌「月かげ」とその楽譜もある。そのうえ浄土宗についての短い説明

文もある。ここまで書いてふと思いついて、手もとにある何冊かの勤行式を調べてみたら、大本山増上寺刊行の和文の『浄土宗のおとめ』が出て来た。発行の年月日がないのでいつのものかわからないが、椎尾法主時代のものであるにちがいない。椎尾法主は平素和文の経本のことを話されていて、四誓偈だけはかなり前から和文で読まれたように記憶している。

次にわたしたちの編集した勤行式を使用して、私がどう思うかであるが、先ず参詣の人々にお経本を渡してあるから、一同がこちらと一緒に讀んでくれることがいい。しかしテンボが合わなくて困ることがあるが、これは当分やむを得ないことだと思ふ。参詣人がふだん寺へ度々集まる人であるなら、自然調子もわかつてくる。お経が読めることは参詣のはげましになる。

以上私は和文勤行式をすすめたが、正直にいうとどうも和文だけでは物足りない気もする。長い歴史を持つている棒読みのお経には、大勢で読む場合など特に不調和の調和といったところもある。そこで和文を主として四誓偈だけ棒読みにするというのも、一つの方法ではないかと思つてゐる。



現代と仏教の接点

平川 彰
ひらかわ あきら

(東京大学名誉教授・文博)
早稲田大学教授

さいきん仏教がジャーナリズムで注目されている。毎日新聞が「宗教を現代に問う」というキャンペーンを長いことやっているが、かなり社会の関心を集めているようである。知識人の間に宗教の再吟味が起ってきたように思う。

その理由は、科学文明に対する失望にあるのではなからうか。科学では現代人の苦悩は解決できないと考えるようになったのではなからうか。原爆の脅威すら解決のキザシがない。現代人は火山の噴火口上の繁栄を享受しているようなものである。その危険を知りながらも、解決の糸口を見出し得ない。これは、人間の欲望や競争心

の問題であって、科学の問題ではないのである。

原爆の問題だけでなく、工業化の異常な発達で、公害が容易ならぬ大問題になってきた。自動車の排気ガスや水銀、カドミウム、農薬などの有害物質は、今後の技術の進歩で食い止められるかも知れないが、しかし原則として、工場が活動すれば、排棄物が必ず出る。生活が派手になれば、生活排棄物、ゴミの排出も年々多くなる。これからも未知の公害物質が現れるかも知れない。これらの有害物質が地球上に蓄積されたら、先はどうなるであらうか。

科学は人間に奉仕しながら、同時に人間を傷つけるものである。この「敵意」に気がついて、現代人の失望と苦悩は大きくなった。つい先年までは、科学文明こそ人類の苦しみを救うものと信ぜられていた。科学に対する信頼は絶大であった。科学の未来は輝しいものと考えられていたが、最近では共産党ですら、科学文明の高度の社会ですら人類の苦悩はなくならないと言うようになった。

科学に対する失望だけでなく、現代人の上にのしかかっている不安は限りがない。その根本は、人間の欲望には限りがないからである。現代は、テレビ・クーラー・自動車・飛行機などにより、見たいものを見、行きたい所に行き、美しい着物を着、おいしい物を飽食している。自分が幸福であることを恐らく何人も認めているであろう。しかし満足していない。より以上の幸福を求め、**「幸福」とか「大金」とかいう** 駅の切符が珍重される時代である。

人間の欲望に限りがないことが、人間を不幸にするのである。仏陀はこれを「渴愛」と呼んで、渴愛を減することだけが人間を幸福にすると説いたのである。しかし

欲望の制限を説く仏教のこの教えは、現代人には受け入れられなかった。欲望を肯定し、欲望をできる限り満すことがよいことなど、誰もが考えていたから、欲望否定を説く仏教は、文明・文化に反するものであるとして非難せられたのが正直なところである。

現代では、仏教者の中にも欲望肯定論者は多い。現世の生活を豊かにすることが正しいことだと考えている人が、仏教者の中にも多い。「禁欲」などというと、若い人たちからつっけんどんに非難されてしまう。仏教は決して一方的な欲望否定を説いているわけではない。仏陀は「苦楽の中道」を説いたのであり、現世の生活を豊かにすることを否定したわけではない。しかし無条件の欲望肯定、無制限に欲望を満足させようとすることは、決して人間を幸福にしない、と説いたのである。

この点が正しく理解されなかったように思うが、ともかく現実には、欲望の制禦をいやおうなしに強制されるようになったのである。公害の問題があるために、無制限に工場や発電所を拡張することはできなくなった。しかし電力がふえなければ、家庭の電化も意のままにならないし、工場の生産も減るであろう。それをどうして譲り

あつて使つていくかという問題がある。そこにはいろいろな分配の方法があるであらうが、基本的には各人が自発的に欲望を制限する自覚が必要である。それがなければ社会生活がスムーズにいくはずがない。

それと同時に、「物の豊かな生活」と別の方面で、われわれが豊かな生活、幸福な生活を作り出す努力が必要である。すなわち、物質的な価値から精神的な価値へ、価値観の転換が必要である。これをやらないと、限られた地球上で物や土地の奪いあいになってしまつて、原子爆弾が爆発するということになりかねない。そのうちに原爆は簡単に作られるようになるのである。

そこで重要なことは、われわれが心の中に貴い価値あるものを見出すことである。人間にとって生命は尊いが、ただ肉体的な生命が尊いのではない。人格の尊厳性をそなえているから尊いのである。真実の自己・仏性を見出すからである。心の中にこの貴いものを見出し得ないと、自己の良心を裏切つて平気であそを言つたり、物のために自己を売渡してしまふということになりかねない。僅かばかりの金銭で汚職をして、一生を棒にふつて

しまふというようなのも、何物にもかえられない尊厳性を、はつきりと自己のうちにつかんでいないからである。仏陀が「自己を大切にせよ」といわれたのは、そういう意味である。

物質的な欲望を制禦することは、ただそれだけでは容易でない。酒のすぎな人に酒を与えて、それを呑むなどいっても無理であらう。感覚的な快楽よりもすぐれたものを、精神的な世界の中に発見することが大切である。昔の殉教者たちが、いかなる迫害にも堪えて信仰を守り通したというのも、そういう尊いものを心の中に見出していたからである。

物質的な快楽には限度があるし、しかもそれだけでは人間に真の満足は得られないという点を、われわれがはつきりと認識することが、現代のトゲトゲしい問題を解決するために必要であると思うのである。

現代人の苦悩という点で、もう一つ問題を指摘すれば、「長寿と死」の問題がある。これも深刻な問題である。医学が進歩して、生老病死の「四苦」のうち、病苦から現代人は大きく解放された。その点で医学の恩恵は

はかり知れない。これはまったく文明の恩恵であるが、しかしここにも落し穴があった。世界全体としていえば、伝染病などが未然に防げられるので、アジアやアフリカなどの第三世界の人口が爆発的に増大しているのである。そのために少しくらいの食糧増産では追いつけず、これらの世界では慢性的に、食糧不足、飢餓状態にある。栄養失調の子供が立上る気力もなく、うずくまっている写真を見ると心がいたむが、どうしようもない。

しかも世界の人口がこの勢いでドンドンふえていったらどうなるか。人口のふえることが、逆に人類の滅亡を引きおこしかねないのである。

しかしこれは直接に日本人の直面する問題ではないかも知れない。むしろわれわれにとって切実な問題は、植物人間や寝たきりの病人の問題、安楽死の問題などである。医学が進歩したために、昔ならばとくに死んでしまふ人が、今ではいつまでも死ねないで生きている。先日、植物人間になってしまった娘を安楽死させてほしいと裁判所に訴えた両親がアメリカにあった。しかし裁判官はこの訴えを拒否した。これは当然なことであるう。

しかし植物人間や寝たきりの病人をかかえた家族が非常な苦しみを受けることは、言葉につくせないであろう。ガンなどの末期には、苦痛で苦しむ苦しみは何ともいいようがないという。しかし医師はあらゆる手段を講じて、助かる見込みのない病人の生命をつなぎ、苦痛を倍加するわけである。

他人が他人の生命をとやかくいうことはできない。しかしわれわれは、自分の生存に対しては決断する自由があると思う。これを簡単に「自殺の肯定」と受けとられては困るが、われわれが、いかなる意味でもこの世に存在する意味がなくなつたと判断したときには、自発的にこの世を去ることは許されてよいと思うのである。しかしこれも自殺の一種であるから、安易になされてよいはずはない。

しかしともかく、寿命がのびるようになると、自分での死を決断しなければならなくなるだろう。しかしこの問題こそは仏教が昔から問題にしてきたことであり、仏教者がこの問題に回答が出せないようであつてはならないであろう。



高

ブータンへの道 (一)

佐藤密雄

(鎌倉大仏殿高徳院住職・文博)

(一) ダーシリンに行く

秘境ブータンが漸く観光客を受け入れるといっているので、参加した。許可を取った旅行社の人と併せて八名。この国は、北はチベット、南はインドであって、ヒマラヤ山脈の東端に位置して、南の斜面にある。亜熱帯であるが首府が標高二千四百メートルもの高地にある国で、極めてしのぎ易く、夏の朝夕には軽度の防寒衣が必要である。日本の九州よりやや大きい山岳の国で、人口は七十五万とあるが、チベットの難民その他で百万に近いとも言われている。

インドのカルカッタ郊外の国内線の飛行場から、ヒマ

ラヤ山脈に向って約一時間北上すると、ダーシリンの入口、バブドグラ空港に着く。この間の飛行機から見降す景色は、見渡す限りの黄色の砂地に緑の丘が点々とする中を、ガンジス河が何の規制も受けずに、幾筋にも分れて蛇行している。これこそインドの大自然という感じがする。朝出発したカルカッタでは、形容のしようもない程の混乱した人間生活の実態を見たのと、ここに見るこのような大河を思いのままに流さす平原とを思い合せると、全くインドは広大である。

到着したバブドグラは、静かな田園の中に滑走路がある感じで、淡紅のコスモスが目立って多い。素朴ともいえる木造二階建の空港ビルがある。一階が待合室、二階

がレストラン。カルカタとの間に、午前と午後とに一便づつが往復するとのことである。レストランで昼食をする。ユッタリとするインド人や白人めいた人達の中で、日本人の昼食はせかせかと二十分位で終ってしまった。また、インドもここまで来れば、生水は大丈夫との話して、コップに生烈な水が注がれたが、しかし敬遠して紅茶とチキンカレーの食事をした。尤も帰路に再びここに来た時は、ブータン慣れしたせいもあって、この生水を思わず飲んでしまったが、大丈夫であった。またこの紅茶は有名なダージリン紅茶であったが、これもあとで気のついたことで、飲んだ時はそれと気付く程の味のものではなかった。

ここがダージリンの入口。大正年間に、河口慧海先生が持ち帰られた「ダージリンより雪山を望む」と記された大写真の額が、宗教大学から受け継がれて、大正大学図書館に永く懸けてあった。先生から西藏語を学んだ私は、その後四十年近くをこの大学につとめている間、図書館に入る度に、この写真を見上げて、先生から、あの雪山の彼方にアノクダツ池（アナバタプタ）があると教えられたこと、この池からガンジス・インダス・ヴァクシ

ユ・シータの、四大河の尽くることなき水が流れ出ると語られたことを思い、先生を偲んでいたのであるが、今ダージリンの入口に立って、先生の旅姿に思いはせることになった。私共は飛行機で来たが、その頃の先生は馬にゆられてここを通り、恐らくブータン東部に向われたのであろう。

バグドグラ空港からブータン国境まで、自動車で五時間かかったが、その中の二時間余が見渡す限りのダージリンの茶畑であった。近頃日本では、セイロンの紅茶よりも、ダージリンものが愛好される由であるが、ここはその原産地である。日本の静岡県や京都府の栽培地とは、その風景が全く違い、スケールも桁はずれに大きい。道路の両側、見はるかす彼方まで、起伏のない平野のすべてが一色の栽培畑である。紅茶を作るには、茶木に適度な日かげが必要とか、高い常緑樹が薄日の指し込むように植込まれて、一見して林をなしている。下枝は相当上まで切り落してあるから、林間は遠くまで見通うせる。その見通せる林間に、深緑の苔を敷きつめたように見えるのが茶畑である。近くで見ると、日本の茶木よりやや高めに刈込んであって、木もやや太目である。茶つ

みをしている所もあったが、サーリを着けた娘達が籠を持って、新芽を摘む風景は、これは見たところ日本と同じに見える。しかし日本よりはややのびた芽を摘んでいた。

インド平野も茶畑も、これを見下し、通り過ぎる目には、大まかでこのびのびしていて、全くアジア大陸を実感させる。帰途のことであつたが、同じ道で紅茶運搬のトラックが横転している事故を見た。紅茶の製品がつまっている大型のダンボール箱が十数メートルにわたって散乱し、破れた箱から出た紅茶が、砂を敷いたように道路を埋めていた。私共の車は、駆けつけた軍用車が道路脇の泥地に枯木等を敷いて、この上を索いて通してくれた。事故の処理もインド風というか、大陸的というか、何かおおまかなようであつた。

(二) ブータンの門

ブータンの国境に着いたのは、夕方の五時を過ぎた頃である。国境には極彩色の、日本の寺院の山門を思わせる大門が建っている。未だ新しいので、先年の王の即位式の時に賓客を迎えるために立てたものと考えられる。

あとで解つたが、ブータンの王宮も公会堂も映画館も迎賓館もすべて、寺院の本堂もしくは講堂風である。全体が極彩色のもの、四面を白壁でかこんで、軒先や入口を極彩色の彫刻で飾つたもので、二階建、三階建のものであるが、すべてはチベット寺院風である。しかし大玉玉をつけたネパール寺院のようなグロステイクなものはなく、朱色と青色と黄色が目立つ彩色であるが、丹念な細密な彫刻に彩色したものである。とくにインド風の裸体像や男女交歡の姿態の如きは全くない。退廃さの全くない日本人好みの、優美なものである。旅行者にはいささかわびしいが、風儀には申分のない国であるとも聞かされた。

この国に瓦はない。屋根はトタン板か木板かであつて、屋根の形はうすくスマートである。軒先には「そり」がなく直線的鋭角的で、幾何学的な美しさがある。国境の門は、増上寺の三門をやや横幅をせばめた程の大きな歓迎門で、道路に大凱旋門風に建てられている。入口は一つで広く、何台かの自動車が並んで通れる筈であるが、門前に日本の鉄道の遮断機と同じものがあり、その前で入国者は降りなければならない。(つづく)



画 竜 点 睛

——辰の年に思う——

やす
安 居 香 山
ざん

(大正大学教授)

昔、中国の梁の時代に、張僧繇という有名な画家がいた。金陵の安楽寺の壁に四匹の竜を画いたのであるが、肝心の眼が入れていない。ある人が不思議に思い、

「なぜ、眼に黒い玉が入っていないのですか」

とたずねると、

「これに目玉を入れると、逃げてしましますからね」

という。まさかそんなこともあるまいと、皆は画家のいうことを、信じなかった。止むなく画家は、一匹の竜に目玉を入れた。

するとどうであらう、一天にわかにかきくもり、雷電がとどろくと、目玉を入れた竜は、壁を突き破って、天に昇ってしまった。目玉を入れなかった他の三匹の竜は、そのまま壁に残っていた。画竜点睛の話である。晴とは、目の玉のことである。

この故事は、事を完全に最後までなしとげ、肝要なことを落さないことを教えている。その一点があるかないかで、画が生きもすれば、死にもするのである。まずわれわれは、竜の年を迎えるにあたり、何事にも、画竜点睛するように心がけたい。

干支の十二支では、辰となつてゐるが、今日ではこれを、動物に当てて、竜としてゐる。しかし、他の十二支はみな実在しているが、この竜だけは、仮空の動物である。中国では、鳳凰などとならんで、古来から、これをめでたい動物として、珍重している。そしてわれわれは、竜といえば、禪寺の法堂の天井に書かれてゐる、あの雄大な竜を思いだす。

黒雲を巻きながら、らんらんと光る眼、するどい鷹のような爪がある五本の指、大きくさげた口からは、煙とも火ともつかぬ

ものをはき、蛇のような鱗^{うろこ}が、見えかくれする。天井一杯に、雷電のように、とどろきわたっている感がある。仮空の動物とはいえ、よくここまで画きあげたものである。

昔の人は、一番雷を恐ろしがった。そして、それを形にあらわしたのが竜だともいわれている。仮空であるだけに、恐ろしさも一倍である。こうした竜であるから、古来、尊ばれ、瑞獣として喜ばれ、そして偉大なものの代名詞とされた。

竜徳というときは、すぐれた徳をいい、竜顔といえは、竜のように立派な顔ということ、天子の顔をいうようになった。竜象^{りゅうさう}というと、力のあるものという意味から、学徳^{がくとく}すぐれた僧侶のことをいっている。そうした竜にあやかるとの年は、竜のごとく昇天の勢いで、大いに躍進せねばならぬ年であろう。

しかしながら、ただいたずらに、天に昇ることはかり考えていては、足もとがぐらついてこよう。中国の五経の一つである易経に、竜にたとえていろいろと、人の歩む

べき道が説かれているが、その中で、

「亢竜、悔あり」

という簡単な警句がある。昇りつめた竜は、必ず後悔するというのである。上に昇ることばかり考えて、つい有頂天になっていると、もうそれ以上昇るところもなく、いつか落ちてしまうというのである。特に、社会的名声を勝ち得たものが、その地位にうぬぼれて、足をふみはずすことを、戒めているのである。どんな立場に立っても、反省することを忘れてはなるまい。自らを知ることは、大切なことはなからう。

この機会に、童年にあやかって、どんな教えがあるか、もう少しみてみたい。

「竜は眠って本体を示し、人は酔って本心をあらわす」

これはなかなか、身につまされる警句である。竜はなかなか、その本体を見せぬものだという。しかし、その竜も、眠ったとき不用意に本体を見ることがあるという。人間もたびたびそれに似たことがあるが、特に酒によったとき、その本性をあら

わし勝ちである。仏教では不飲酒戒^{ふちんしゅかい}というのがあって、五戒の中に入っている。ほどほどにせぬと、我が道をあやまるのが酒である。百薬の長とはいふものの恐ろしい毒でもあり、化^{ばい}の皮をはがす特效薬でもある。竜とともに、大いに慎みたい。

源平盛衰記の一節には、こんな文がある。

「三界火虎の世、竜の顔^{かお}を撫^なづるがごとし。五趣輪廻^{ごしゆりんね}の界、虎の尾を踏むに似たり。」

この世は、焼けている家の中に居るようなものであり、無常の世である。危険極まりない。それは、竜のひげを撫でたり、虎の尾を踏んだりするような危険な世であるということを譬^{たと}えていつているのである。確かに竜のひげなどにさわって、怒られてもしたら、それこそ大変である。それでいて、われわれは一向にその危険も知らず、のんびりと過し、平気で虎の尾を踏む生活をしている。刻一刻と、尊い生命の時の過

ぎるのも、忘れ勝ちである。いつも、竜のひげを撫でにしているような緊張感が、ここでは求められているのである。

こうした時、私はよく善導大師の六時礼讃の無常の偈を思いだす。意味をとると、大体次のようなことをいっておられる。

人間は毎日いろいろな仕事に追われて、生命の燈が、一日一日と消えようとしていることを、一向にさとらない。そして、忙しい忙しいと走り廻り、どうしてこの苦の人生をぬけたらよいかと、考えようとしなければ、そうした人生を、恐れようとしな

い。さあ、おまえたちよく聞きなさい。いま健康で力のあるうちに、自から励まし、努力して、常任不変の道に安住するようつとめなさい。

この最後の「おのおのの聞け、強健有力の時、自策自勵して常住を求めよ」という善導大師の叫びが、私の耳を強く打つ。と

角、仏教は人生の無常を説き、苦を説きがちである。しかし、それはあくまで、更に重要なことを説くための前提である。無常を説き、苦を説くことは、それを悲しみ、恐れよということでない。

善導大師は、この問題を、現在のわれわれに、直接なげかけている。それは、だから今元気のうちに、求めるものを懸命に求めておきなさいという力強い警告である。未来にばかり気をとられず、現在の今に目をそそぐよう説かれているのである。まさにそれは、禪でいう脚下照顧である。

竜のひげを撫でる話から、話は半分飛躍したが、何時も竜のひげを撫でているつもりでいれば、自策自勵せざるをえないこととなる。

ところでこの竜は、鱗があるところから、よく蛇と比較して語られる。よく似ているのであるが、竜と蛇では、月とすっぽんほど違ふのである。そんなわけで、「竜蛇混雜」などという語もある。賢者と愚者が雑然とまじっていることをいうのである。賢が竜で、愚が蛇であることは、いうまでもない。

もない。

「竜頭蛇尾」などということも、これに類した語で、頭の方はよいが、尾となると丸で駄目なことで、始めは一生懸命やっているが、最後までやりとげず、放りだしてしまうことに譬えられている。蛇にとつては、甚だ迷惑な譬えであるが、よく心すべきことであらう。

こう考えてくると、竜の年は、油断していらぬ大切な年であることを、その譬えは、いろいろと教えてくれる。そこでもう一度、最初にもどってみよう。

この一年が、果してどんな年になるかは、私の力では何とも分らない。しかし、とも角ここに新しい年を迎えたからには、竜にあやかり、いろいろな教えにならつて、自策自勵し、一步一步と確実に三六五日歩んで行かねばならない。そしてこの年のみそかの日に、画竜点睛を忘れてはいなかったかを、ふり返ることとしたい。いや、その時、点睛するのでは遅からう。一日一日が画竜点睛でありたい。



巨大な惑星

浄土教の流れ



たけ なか しん じょう
竹 中 信 常

(大正大学教授・文博)

— 〇 一 〇 —

西方に大山が聳えている。その麓を清流が洗い、河原は広々としてその奥に鬱蒼とした森が広がっている。遙か西山の山腹辺りから、一塊りの紫雲が湧き出したと思うと、みるみるうちに川を越してすぐ目の前まで飛んできた。不思議に思っただけで、紫雲から煌々と光明が四方に輝き、孔雀、白鶴、鸚鵡、鸚哥など美しい鳥が

数多く飛び出し、河原に舞いおり、あるいは美しい声で啼き始めた。ふと気がつくと、紫雲に乗って一人の僧が近づいて来る。上半身は質素な墨染のころもであるが、下半身は金色に輝いている。余りの神々しさに「あなたは、一体、どなたなのですか」と問うと

「われは善導である」

「何のためにお出でになったのですか」

「あなたが専修念仏を弘めておられるのが貴いからで

ある」
と答えられた。

浄土宗の開祖である法然上人が、中国の浄土念仏の高祖善導大師と会われた、夢の中のありさまである。善導大師は中国で浄土教を弘められて千三百年前に亡った。その後、五百年を経て法然上人が四十三歳で浄土宗を開かれた。その間、時間的には五百年、空間的には日本と中国、数千キロのへだたりがあった。それが、一夜、法然上人の夢の中に善導大師があらわれ、時間と空間のへだたりを一瞬のうちに埋めて、念仏の流れは滔々として少しのよどもも、と切れもなく、今日にまで続いて来たのである。その尊いお二人の対面の場に、空中に、アリアリと浄んだ文字があった。

究竟大乘浄土門
諸行往生称名勝
我聞萬行選仏名
往生浄土見尊体
右の四行の偈である。
蕪雜であるが、その意味するところを述べるならば

大乘仏教をつきつめて行くと浄土教に行きつく
極楽に往生するには、いろいろの方法はあるが、南無
阿弥陀仏と称えることが一番すぐれている。

それ故、わたしはすべての修行の方法をさしおいて、
ただ、仏の名を称える方法を選ぶ。

そして、極楽に往生して、尊いみ仏に会いたてまつる。
八万四千もあるといわれる仏教の教えの中で、われわれ凡下が一番適して、しかも、当然そこに落ちつく教えは、浄土の念仏であることを、善導大師は法然上人に伝えるために時間と空間を超越して夢枕に立たれたのである。



わたしたちはすでに、浄土教の専門の人々から、浄土の教えのすぐれていることを再三教えられて来た。法然上人の専修本願念仏がいかに尊いかということを、さまざまの角度から説明されて来た。そして、自分でも少しは分ったような気がしないでもない。

しかし、少しくその説くところをふりかえってみる

と、どうもいままでの浄土信仰についての説き方は、法然上人を原点として、逆に釈尊にまでさかのぼる。いわば歴史を逆まわしする仕方のように思えるのである。もちろん、法然上人を宗祖と仰ぐわれわれにとつては、こうした考え方なり、説き方なりは当然のことかも知れない。しかし、これでは、「究竟大乘」にはならないのではないだろうか。究竟ということを、「きわめつくす」という意味にうけとる限り、上から下へ、というか、過去から現在へという、いわば時の流れに沿って、そして最後に、どうしてもそこに「行きつく」というふうを考えるべきではあるまいか。——そうすると、法然上人を原点として、逆にさかのぼる行き方は「究竟」でなくて「選択」というべきであろう。

「選択」とはいうまでもなく「選択本願念仏」のことであり、法然上人がそれまでのいろいろな教門の中から、末代の、下品下生のわれわれにふさわしい教えをつまら本願念仏を選び取られたことである。こういうことは法然上人だからできるのであって、凡俗のわたしたちには到底なし得るわざではないのである。それゆえ、法然上人は、わたしが選んであげたお念仏を「智者のふる

まいをせず、ただ一向に」唱えれば良いのだと教えて下さっているのである。——信仰の世界ではこれで良いのである。

しかし、二十一世紀に入ろうとしている今日の時点では、そうした信仰の裏付けとして、どうして「浄土のお念仏が出て来たのか」ということ、仏教というもののが「どうしてもお念仏の教えにまで落ちつかなければならなかった」道筋を辿る必要があるのではないだろうか。つまり「究竟大乘」すれば浄土門になるということを、納得のゆくように辿ってみることも、近來、理屈ばかりが先に立つ世の中では必要なのではないだろうか。

二祖対面の際、空中にあらわれたという、「究竟大乘……」の一文は、まさしく、法然上人が到達した本願念仏の境地が大乘をつきつめ、念仏を選びとったものであることを示している。それだからこそ、このことを告げるために、はるか中国から、五百年の時の隔りを紫雲に乗って飛んで来られたのであろう。

法然上人から釈尊に向ってではなく、釈尊から法然上

人に向つての筋道をたどる時、その出発点をなすものは「念仏は釈尊出世の本懐なり」(觀經疏)の一句である。

つまり、釈尊がこの世にお生れになり、悟りを開き仏教をひろめられた、そもその目的は「念仏」を教えることにあったというのである。また法然上人は、「名号はこれ万徳の歸するところ」(選択集)といわれている。名号すなわち、阿彌陀仏の名をとなえることは、あらゆる功德がこもっているともいわれている。

いふなれば、仏教はそもその出発点から念仏を目ざしており、その歸着点も念仏なのである。そして、釈尊と法然上人とを結びつける位置にある善導大師は「結歸一行三昧」の教えを説かれたのである。ひらたくいうならば、仏教というものは、結局のところ、念仏を一生懸命にとなえることだといふのである。

このように、浄土門のわれわれが、何者よりも深く、高く尊敬する三人の方々が、口をそろえて、仏教は念仏に至るべきことをいっておられるのである。

それならば、釈尊に始まる仏教が、法然上人の念仏の教えに歸着する道筋はどのように辿ったらよいであろうか。これはしかし大変むずかしいことである。その道の

専門の学者でも、仲々に手をつけにくい問題である。しかし、むずかしいからといって、これをよけて通ることは許されない。なぜなら、現代に生きる、どちらかというところ、ものごとを納得づくで理解しようとする人々に解ってもらうためには、なるほど浄土念仏の信仰というものは、そうだったのか。それだから、今日にもなお生々とした信仰を持ちつづけているのかと納得してもらわなければならぬからである。

今まで述べて来たことを簡単にいいかえるならば、仏教というものの、ことに浄土教というものを、内側からアレコレと説明して来た今までのやり方をひっくりかえして、一度仏教を出て、そしてまた浄土教からはなれて、これを眺めなおそうといふのである。下手なたとえだが、地球が丸いといふことをはつきり見るためには、宇宙船にのって、地球の圏外にとび出す必要がある。とび出してみて、はじめて、地球が宇宙の空間に緑色に美しく輝く、巨大な物体として浮んでいることがわかるのである。こうした見方で、次回より仏教という巨大な惑星を眺めることとしたい。



法数術語十二ヶ月（二月の巻）

たから
宝 田 正 道
だ まさ みち

仏教では、教理を説くのにそれを分類、整理し、或る

数でまとめて示す場合が非常に多い。この数のことを

「法数」という。四諦、八正道、十二因縁などの「四」

「八」「十二」などは、いずれも法数であるが、經典の中

にも法数を中心として説かれた『増壹阿含經』『本事經』

『法集名数經』などがあり、中国では『法門名義集』や

『大明三藏法数』などのように、法数はかりを集めて編

んだ書物もある。

これらの法数術語の中から、一年十二カ月に因^よんで、

一月は「一」、二月は「二」という法数のついたものを

選び、若干の解説を施せ、というのが、編集部から出さ

れた注文である。

しかし、これはやさしいようでなかなかむずかしい問

題である。たとえば、「一」という法数のついた術語を

考えてみると、固有名詞を除いただけでも優に五、六百

語は超えるほどあるだろう。それらを全部挙げて解説す

ることはとてもできる業ではなく、またその時間も紙数

もない。そこでいきおい、何本かを選ぶことになるが、

これまた基準を定める段になると容易でない。止むなく

今回は、一般仏教常識として必要と思われるもの、ある

いは特に浄土教ないし浄土宗に関係が深いと考えられる

ものなどを中心に厳選して、なるべく簡単な説明をつけ

ることとする。大方の期待に十分をいえないかもしれないが、あらかじめお許し願いたい。文中（→）を付してあるのは、その項目を参照せよ、という意味である。

一月三舟いちがつさんしゅう

仏道は一つであるにもかかわらず、人の受取り方によっていろいろに解釈される譬え。川に舟を泛べて月を仰ぐとき、停っている舟から見ると月は月が停止していると感じるし、南行の舟から見ると月は月が南へ動いていると思う。また北行する舟からは北行しているように見える。このように三舟それぞれに一つの月を違うものと感ずること。「一水四見」も似たような意味。

一夏九旬いちげくじゅう

四月から七月にいたる一夏九十日間、外出せず寺に籠って安居の行を修する、その期間。単に「一夏」ともいう。

一期一会いちごいちえ

一期は人の一生、または修行の一期間をさす。一会は本来一つの宗教的集会、あるいは一わたり、一とおりの意（念仏一会）であるが、一期一会はそれから転じて、生涯たった一度きりの機会をさす。茶会の心得として尊ばれる。

一乗いちじょう

一つの乗物で、一仏乗ともいう。三乗（声聞・縁覚・菩薩）の道に対して、衆生を乗せて悟りに導く教えはただ一つしかない、とする法華経思想に基づく天台宗の代表的見解である。

一大事因縁いちだいじいんねん

仏が出世してすべての有情を救うという最も大事な因縁。禅宗では修行の一大眼目のこと。一般には悟りを開く大切なきっかけをさす。

一念義いちねんぎ

法然門下（華西）の異義の一つ。極楽往生のためには

数多くの念仏は不要で、ただ一度だけ念仏すればよい、と説く。これに対して、できるだけ多く念仏の功を積むべきだとする多念義（隆寛）が起り、一念か多念かの論争は後世まで長く尾を引いて続けられた。

一 念三千
いちねんさんぜん

一瞬ごとに心の動きは三千種にも変化する、と説く天台（摩訶止観）の主張。この三千の中に宇宙の一切の現象が含まれる（↓「十界互具」と説く）。

一 味
いちみ

一般には仲間の意に使うが、もとは海水の塩味がすべて同一というところから、あらゆる事象や本質がみな平等であることをさす。

一 類往生
いちるいがうじやう

ある一部の人々だけが浄土に往生でき、念仏以外の諸行を修する者は往生できない、と説く西山派（証空）の見解。

一 蓮托生
いちれんたくじやう

同じ一つの蓮台に往生するという原意から、善きにつけ悪しきにつけ、行動や運命をとにもする場合に使う。

一 九之教
いつくのきやう

浄土教の異称。九品往生（二九之生）の教えという意味からきたもの。

一 光三尊
いっこうさんぜん

仏像の一形式。一つの舟型光背の中に中尊と左右両脇士を切離さず一緒に安置したもの。

一 向專修
いっかうせんじゆ

余念をまじえず、ただひたすらにもっぱら称名念仏だけを修すること。浄土宗（法然）の本義である。

一 一切衆生悉有仏性
いっさいしゆじやうしゆぶつじやう

生きとし生けるものすべてみな仏となる可能性（仏性）

をもつという意（北本涅槃經）。「草木国土悉皆成仏」（法華經）に同じ。

一色一香無非中道

一つの色、一つの香をもつどんなものにも、仏の説く中道の理が現われているとする、天台（法華經）の説。

一生補処

一つの生涯だけ迷いの世界に縛られるが、次の世には仏処を補って仏となることを約束されていること。菩薩の最高位。法蔵菩薩の立てた四十八願の第二十二願に「一生補処の願」がある。

一心三觀

一心の中に空・仮・中三觀の思いを同時にこめて觀法すること。天台宗の觀想法の一種。

一闡提

善根を断ち、信を具足しないため、どんなに修行して

も救われる見込みのない者。正法を信ぜず、成仏の縁を断たれた者。仏性論の立場から法相・華嚴・天台等の諸宗で大いに論争されるところ。

一体三宝

三宝の一解釈。また同體三宝ともいい、三宝の一々は同體で、それぞれ仏・法・僧の意を含んでいるとする考え方。これに反して別々のものとみなすのを別體三宝という。

一音教

仏の教えは一音で説かれたが、これを受止める側の機根によって多種多様に見える、とする見解。菩提流支の立てた教判。また、一円教ともいう。

一品經

寫經にあたり、多人數で一部の經を一品ずつ手分けして書寫したもの。平安末期には『法華經』二十八品を一品ずつ仕立てることが流行した（平家納經）。

明けましておめでとうございます。
本誌愛読の皆さんも御機嫌よく御越年なされ、御多幸



(龍の古い字)

丙辰新春

書 初 随 想

林 はやし
錦 きん
洞 とう

(東京三田貞林寺住職・書道家)

な新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

今年の「えと」は「丙辰・ひのえたつ」の歳に当ります。十二支と「えと」の組み合わせが最初の甲と子から始まって再び甲子に還るのに六十年かかりますので、これを還暦と称して長寿を祝う習わしがあることは皆様よくご存じのことと思います。今年の丙は五行の中では火に当り、方角では南を示します。後に火扇をつけて炳としたように、内に火が燃え盛っていることで、万物の盛に生成することを意味した文字です。辰は震で、三月になると陽気が盛んとなり雷が振うという意味で、これまた

書
の
四
季

燃え盛る陽気ということですから、丙辰は誠に活気溢れる歳と申せましょう。辰は後世になって竜に擬して用いてますが、竜もまた「雲と為り雨を帯びて千里を飛び、霧を吸い風を呼んで九重に上る」などと詩に詠まれるように威勢のよい縁起ものです。

ところで
科学万能、
宇宙旅行も
夢でなくな
った二十世
紀とは申し
まして、
当今リバイ
バルムード
が盛んで、
何でも昔の
ものが懐し
くよみ返っ



(年頭書業成就の誓願)

ているご時勢です。正月の和服姿も若い人々にもてはやされ、羽根つき・かるた会、そして初荷・出初式などと新春風景を鮮かに浮彫りさしてくれまう。温故知新の気風が盛んです。

初釜、語初め、弾初めと同じように、書の方でも書初めという新春の行事があります。正月初めに目出度い文字や詩歌を書いてこれを歳徳神に供えるというのが、その初まりとか言われ、平安時代公家の間でも既に行われていたようで、また鎌倉時代になりますと吾妻鏡に吉書初の言葉もあり、かなり古くから行われていたことがわかります。

現今書初めと言われるものは、やはり江戸時代になって寺小屋教育の普及につれて盛んとなり、そのまま明治を経て今日に伝承されたものと思われまう。古くは暮の二十九日に行った(百鍊抄)とあり、江戸の天明頃には正月五日に行われたと言われますが、明治以降は二日にやるのが通例となっていました。私の寺では例年五日と定めております。

寺小屋ではお師匠さんが袴を着して端座し、子弟は羽織袴で教場に上り、一人一人呼び出されて揮毫する。こ

れを室内に展示して後、おしるこやあべかわ餅を馳走になり、福引きなどもあって楽しい正月気分を味ったと言われています。やがて七草までの期間までならよいというので、この間に集まるようになり、おぞう煮やお酒も出るようになりました。

当今も全く同じやり方で、門人達が正装して師匠の家とか、特定の会場に集まり、予め浄書した書初めを持ち寄って展示し、年頭の賀詞交換、師匠の挨拶などあって宴会という形のです。私事で恐れ入りますが、仏教書道的な書初式もあってよいわけですので、既に先代の



(書初式風景)

時から同じ形式で行っております。

御本尊前を荘厳し鏡餅を供え、松などの献花、赤蠟燭を灯し、幹事の進行係によって如法に勤められてゆきます。会員一同入堂着席のあと、会長導師をつとめ開式の辭となります。以下次第は次の通りです。

万邦和平安康 邦家文運隆昌

先亡会員追福 合掌黙禱

若水奉獻 (未婚女性)

献香恭拝 (長老幹部)

読経 三奉請 懺悔十念 開経偈 般若心経

表白文 (中堅幹事)

試筆

誓詞捧読 (男子女子各一名宛)

天下和順の文 同唱

書業成就誓願 同唱十念

以上

試筆は四〇センチ×二メートルの紙が展べられ、四名一組となって仏前に正座します。会長の割笏第一下で礼拝、第二下でおもむろに筆をとり試筆にうつります。予め考えてある寿語詩句を一気呵成に浄書します。四名が書き終ると、これを声高らかに朗誦、割笏一下で礼拝

して順次交代、全員が行います。この後会長により二十
畳敷大の紙に箒のような大筆で、その年の干支に因んだ
寿語を大書します。

浄書し終った書初めは仏前に献じ、小憩の後新年宴会
となります。来賓や会員、一堂に会して寿杯を挙げ、宴
酣ともなれば清興酔興も飛び出して、新春の一刻を莊嚴

の中にも楽しくお開きということになります。
大分前になりますが、この書初式や大字揮毫が朝日ニ
ュース映画やテレビで取材されて、全国に放映されたこ
とがありました。ともあれ新年早々身心の引き締る気分
を、こうした行事の中で体験して、日本の心やくらしの
伝統にふれてみることはよいことです。



竜宮童子

〈肥後の民話〉

うち やま けん しょう
内山憲尚

(日本童話協会会長)

むかし、肥後の国（熊本県）の田舎に一人のお爺さんが
いました。このお爺さんは毎日山へ行って薪をとり、そ
れを町へ持って行って売り、それでほそぼそ暮しをたて
ていました。

ところが或る日——どうしたことか一把の薪も売れま
せんでした。

「薪や薪や／薪や薪……」

一日中呼び歩いて、どうしてもうれませぬ。お爺さ
んは、疲れ切って町の川のところへ帰って来ました。
「今日はいったい、どうしたというんだらう……」
重い薪を背負ったまま、一日中歩いてても一把も売れや
しない。家まで持って帰るのも大変だ。この川へ投げ込
んで行こう。そしたら竜神様が何かおつかいになるかも
しれない。

お爺さんは薪を一把づつ、橋の上から川の中へ投げ込みました。そして、

「竜神様、竜神様、薪をさしあげますから、何かのお役に立ててくださいませ……」

と、拝みました。

お爺さんは薪をすっかり川の淵へなげ入れてしまうと「やれ、やれ、今日はいい事をした、お蔭でわたしも軽くなって助かったわい……」

と、帰ろうとすると、淵の中から美しい女の人が、小さい子供を抱いて出て来ました。

「お爺さん、ただ今は薪をたくさんにありがとうございます。竜神様も大変およろこびになって、お礼に竜宮の子供を一人くださることにしました。この竜宮のお子さんは「鼻たれ小僧さん」といって、ほしいものがあつたらお願いして鼻をかめば、その願いをなんでも聞いてくださいます。その代り一日に三度、つつ海老の膾（なます）をさしあげねばなりません。わかりましたか。それではお爺さん、さようなら」

と、いったかと思うと、水の中へ消えてしまいました。お爺さんは竜宮童子を自分の家へつれて帰り、神棚の

わきに置いて大切に育てました。

「竜神様、お金をお願いいたします」

といって、はなたれ小僧さまのおはなをかみました。するとどうでしょう。竜宮童子の鼻の穴から銀の小つぶのお金が、ポロポロと出てきました。

お爺さんは、だんだんお金持ちになり、立派なお家や蔵をたくさん建てて、大金持ちになりました。

そのうちにお爺さんは、毎日町へ行って海老を買って来て、膾をこしらえるのが面倒になってきました。

そこで竜宮童子さんに、

「もう立派な家もでき、大きな蔵もたくさん建ったから、あなたに用事はなくなりました。毎日三度、つつ海老の膾を作るのが面倒くさくてたまりません。もうお帰りください……」

と、いいますと、竜宮童子は淋しそうに表へ出て行きました。が、どことも知れず帰ってしまいました。すると、どうでしょう、今まであつた、たくさんのお蔵は一つもなくなり、立派な家もなくなりました。お爺さんはたったひとり、きたらしいあばら家に、しょんぼり坐っておりました。

念佛ひじり三国志

(三)



—法然をめぐる人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



平資盛がおそれていた最悪の事態がやってきたのである。

北陸での大敗北。倶利伽羅谷の織滅戦をわずかに逃がれた平家の軍勢は、なだれを打って近江路を潰走する。坂本の近くで後詰めをしていた資盛の隊までが、この潰走に加わってしまった。

この醜状を目撃した比叡山上の衆徒が平家を見限ったのは当然だろうともはや説得も調略もなかった。

資盛は空しく山科口へ引揚げた。

池ノ大納言頼盛邸があつて、そこには身重な新妻が待つていた。彼女は大納言の孫娘なのである。

「内大臣はわしを……」

と、頼盛はいきなり言つた。諸兵をひきいて山科口の防衛司令官になれ、と命じてきたというのである。

柔和な顔つきの老人だつた。だが黄色く濁つた眼の奥でまたたくものは、意外に鋭い。いまの言葉にしても、顔の輪廓だけから判断すれば、「武辺とは縁のないこのわしを」と迷惑がつているように取れる。しかし鋭い眼

<潰 走>



前号のあらすじ

大福長者五条大納言邦綱の葬儀が正親町の屋敷で営まれた日、藤原隆信は義理の妹になる右京大夫に声をかけた。隆信とは、法然上人の御影などのすぐれた人物画を描いた絵師であり、その手法は似絵と呼ばれた。今、隆信は右京太夫に、姿絵を画いてあげよう、というのであった。彼らの父こそは、歌道の大家藤原俊成であり、これを契機として隆信と右京大夫は一夜のちぎりを結ぶ。右京大夫はすでに平家の若大將平資盛とも関係があったが、このことから隆信は資盛への関心を強くした。

世は木曾義仲の京都への乱入の前夜であったが、似絵師隆信の筆は気ままに動いた。友である関白九条兼実から聞かされる政情分析にもまして、絵筆に托される人物像が歴史の一幕を活写していた。

光の方は何を愚かなことをと、一門の総帥内大臣宗盛卿の処置をあざ笑っている。

さすがは平相国清盛の実弟だった。ただのお人好しではない。

「木曾勢をこんなところで支えきれないのでしょいか」

山科の邸内にいる兵力は三百騎がやっとだ。

「なあに時を稼ぐのじゃよ。内大臣は法皇、帝を奉じて西国へ落ちてゆくつもり。木曾勢に追いつがらぬようにな」

いよいよ都落ちに決したか。

近江からの道中で、将兵が口にしていた噂が実証されたわけだ。

「それで、法皇も帝も御所をお出になられたのですか」
「うむ。安德帝を法住寺の院ノ御所へお移し申ししたわけだ」

法皇と安德帝は目下同じ場所にいらっしゃるという。
夜が来た。

頼盛邸はひっそりとし、庭前で燐り火すら焚こうとはしない。これでは最前線の防衛陣地とは言えない。

もともと頼盛は武事には無縁の人だった。武断政治を強行した平家一門にあって、彼だけが宮廷や貴人の間で評判が良かった。ことに近ごろは、温厚な長者の風格をそなえつつあった。

孫娘を北ノ方に迎えるとき、資盛は初めて池ノ大納言と会った。柔和な顔の奥できらりと光るものを感じたのであった。

夜が深まると、供の者が資盛を呼びにきた。

「大納言にはこれから山へお登りになります。頭の中將どのもご同行なされますようにとのことで」
「これから比叡山へ登るのだと」

理由を問いたただす相手ではない。年若い侍者なのである。

「あなたはさきに寐すんでいなさい」

と、北ノ方にやさしく言った。

十七歳の北の方は、妊娠六カ月の身だった。立居振舞いが大儀になりかけた昨今である。心細げな眼で夫を見上げてくる。年上の右京大夫から色の道万般を教えこまれた資盛だが、いまこの若妻をしみじみといとおしく思った。

侍者数名を連れて、大納言頼盛は闇の庭で孫舞を待っていた。

「急ぎ西塔へゆく」

「しかし山の衆徒は木曾方へ同心したのではございませぬか」

いまや山上は平家にとって敵地ではないのか、と問いただしなかった。

頼盛は無言だった。西塔へのぼってゆく道中も終始口をひらかなかった。

七月の末、夏のさかりである。だが比叡山の山気は、こんな夜陰ともなると冷えこんでいる。西塔のはずれ、鞍馬へ下る路傍の小さな仏堂へ一行はいった。無人の

薬師堂であつた。

そこで頼盛は重大な事実を告げた。

後白河法皇が、すでにこの西塔へ忍んで来ておられる
というのである。

「法住寺の院ノ御所ではなかったのですか」

「そこを脱出されてな」

「とすると……」

平家はまふまふと法皇に裏切られたことになるではない
か。

頼盛は若い公達に余計な口をきかせなかった。現実だ
けをひたむきに見つめる。

「法皇から夕刻に使者があつてな。お召しを受けた。わ
しはこれから拝謁申上げてくる」

「……」

「いづれおぬしにもお召しがあろう。此処で待つておる
がいい」

「……」

「おぬしはかねがね法皇の寵愛を受けていた。必ずお召
しがある」

ことの筋道、家門への節義。そんなものをいっさい無
視して、頼盛は現実論だけを楯にしゃべっている。

こう言い残して薬師堂を出ていった。

安德帝を法住吉の院ノ御所へ移し、総帥宗盛は法皇と
帝を擁して西国へ落ちる構想を立てた。福原あたりに都
をうつすつもりだろう。だがその監視の眼をかくぐつ
て後白河法皇は脱出したのだ。平家と離反した比叡山上
へ逃げて来られたのだ。

これが、まぎれもない現実だ。

その法皇がなぜ同じ平家一門の大納言頼盛に招いたの
であろうか。また頼盛卿はこのここの出かけてきたのであ
ろうか。

おのれ一身の安全を――

資盛には未だこの現実をそこまで分析する能力がな
かった。

いや、能力というよりも直視できなかったのである。

武門の身として恐ろしいことだったからである。

明らかに頼盛卿の行動は一門を裏切っている。

また後白河法皇に寵愛されている資盛。それは彼が筆
をよく弾くからであるが、そんなことを洩らすのは、おぬ
しの身の安全も法皇にお願いしてやるぞ、という意味では
ないか。

こんな裏切りが許されるのであろうか。

薬師堂にひとり取り残された資盛は、悶々と悩んでいる。

すでに山上で、夜が白々と明けはじめた。頼盛はあれきり戻ってこない。

果たして法皇に拝謁できたのかどうか。

昨夜、資盛を迎えにきた若い侍者が薬師堂に現れたのは、太陽がだいぶん昇った刻限だった。

「急ぎ山科へお帰りになるように、と大納言卿のお言葉です」

「山科へ……法皇への拝謁はかなわぬのか」

「さあ、私にはさっぱり」

「頼盛どのは、いまだこちらに」

「さあ、存じませぬ」

何をたずねても答えなかった。

麓まで下り、昨夜そこで乗り捨てた栗毛にまたがった。

同行してきた若い侍者は、

「ではいずれまた」

と馬に鞭をくれると、山科とは反対の方角坂本の方へ

走り去ってしまった。

どこへゆくつもりなんだろう。

林のなかで、馬に草を噛ませながら、資盛は不安の表

情を結んだ。

資盛自身は、薬師堂で坐りこんだままだった。だがこの十時間余りで、事態は目まぐるしく発展していたようである。

一一

資盛が知らないだけである。

大納言頼盛は、これから西塔の仮行在所で後白河法皇に拝謁したのである。

「そちの身を案じて……」

この拝謁は、法皇側でより積極的だったようである。

それはなぜか。

後白河法皇らしい政治の読みと言うべきであろう。

法皇は、平家にとってかわる次の覇者を源頼朝と読んだにちがいない。この頼朝に対して、清盛武断政治の独走を許した法皇は、いかにも恰好が悪い。現に「頼朝追討令」を法皇の名において発したりしているのだ。

この戦犯容疑から身をかわすためにも平家一門における唯一人の和平派、池ノ大納言頼盛と手を結ぶ必要がある。自分たち和平派は、平相国清盛の暴政に圧迫され

た共通の被害者なんだ、という立場を造作することができる。

それと、池ノ大納言は頼朝にとって切り札のような存在でもあった。平治の乱で源家一門がすべて処刑されたとき、十三歳の頼朝の命だけが救われた。頼盛の母親が熱心に助命を願ったからで、これは天下周知の事実であった。

いわば頼朝の命の恩人だ。池ノ大納言を抱きこむことは法皇にとって、今後の政局に処する上で甚だ重大だったのである。

頼盛は拝謁したとき、孫聳の資盛がすぐ近くに来ていゝる事実は言上したらしい。拝謁を許して欲しいと懇願もしたようである。

ところが法皇は終始、聞こえぬふりをよそおって返事をしなかったという。

資盛は不可なのである。たとえ清盛のやり口に批判的だった小松内府重盛の息子とは言え、それは平家内部のことであって、資盛を許す理由にはならない。れっきとした平家の公達を抱えこんでしまったら、釈明がつかなくなるではないか。風流の道での寵臣なぞ、この際問題にならなかつた。

それにしても安德帝を法皇の御所へ移しただけで、兩帝は確保したと思ひこみ、監視の眼をおろそかにし、また野党とも言うべき池ノ大納言頼盛を山科邸へ野放しにした総帥宗盛は手ぬかりぶりは平家の歴史を抹殺するにひとしい行為であった。軍事はともに、これでは政治的に打つ手が何一つなくなつたことになる。

さて山科の大納言邸へひとり帰つた資盛だ。彼は眼をみはらぬわけにはいかなかつた。

邸内はひっそり閑としてゐる。三百騎ほどいた兵士の姿もない。そればかりか大納言頼盛もその家族たちまでが姿をかき消してゐたのである。

ひとり対ノ屋でやすんでいた北ノ方に事情をたずねた。今晩のことだ。二台の牛車が庭前にひかれてきた。北ノ方の実母（頼盛の娘）以下その弟妹たちを乗せると、いづこかへ去つてしまつたという。

「おぬしには声をかけなかつたのか」

「ハイ、何にも」

「母上は別れの言葉でも」

「それが、ここへお顔も出さずに立ち去られました。どういうことになっているのでしょうか」

資盛にもようやく現実の推移がのみこめてきた。

池ノ大納言一族は、孫娘夫婦を置き去りにして逐電してしまつたのである。まるでこの若夫婦が自分らの運命を呪う魔神であるかのように忌み恐れて。

祖父はともかくとして、その実母までが……資盛は暗然とならないわけにはいかない。人間の愛情が無残に断絶してしまつたのだ。

「小次郎はどうした？」

坂本から終始随侍してきた近習の名を口にした。小次郎以下、四騎いたはずである。

北ノ方は彼らも今朝方どこかへ逐電していったと告げた。

若い夫婦二人だけが取り残されたのだ。しかも妻は身動きも容易でない妊娠の身であつた。

どうしたらいいのだろう。

「一門と行動を共にしなければならぬ」

と資盛はやがて言い放つた。

ぐずぐずしていると、木曾勢が乱入してくる。近江は山科とすぐ眼と鼻の間だ。湖畔には木曾勢が満ちているはずであつた。

北ノ方に狩衣をかぶせ、栗毛にかかえ上げた。資盛はくつわを取ると、ゆっくりと駒を歩ませた。

東山の麓に添ってゆく細い杣道をえらんだ。大半が林間を縫う道だ。時たま斜面の狭い畑に出会つたりする。

どこまで続く杣道なのだろうか。目的地は皆無であるいや目的地は一つあつた。六波羅だ。

しかし道が洛中を俯瞰する小峯をめぐる地点へさしかつたとき、六波羅とおぼしきあたりへ視線をやつた。ただけしい黒煙が立ち上つていた。

六波羅屋敷は焼けているのだ。まだ木曾勢が追つたとは思われない。みずからの手で焼いた、ということは一門の人々がすでに都を落ちていったことを意味する。

この栗毛を疾驅させれば追いつけるだろう。だが馬上には身重の北ノ方が乗っているのだ。ゆっくり、ゆっくりと進まねばならない。

ゆくてに人影が一つ現れた。

資盛は緊張した。

烏帽子姿のその男。武人ではないようだ。そればかりか近づく、顔に見おぼえがあつた。

「頭ノ中将」

先方から声をかけてきた。

似絵師の隆信ではないか。

「またお会いしましたね」

資盛の口もとにも笑いがこぼれた。

思えばこの五月、北陸出陣の道すがら、鞍馬の道で出会ったではないか。

「こちらは」

と隆信は馬上を見上げる。

「妻です」

うなずく隆信を凝視しながら。資盛は運命の暗合に気づいた。

五月に路傍で出会ったとき。ふと口からついて出た言葉があった。

身重の妻を、あなたに頼むことになるかも知れない、といま、まさしく隆信の好意にすがりつかねばならぬ事態なのである。

しかし隆信の好意とは言うが、自分たちの結びつきはいつたい何なのであろうか。たまたま右京大夫という愛人を共有しただけではないか。情夫同士の好誼——いや二人の人間関係にまだ好誼などが芽生えているかどうか。

「どちらへゆかれます」

と、隆信は訊く。

「一門に従って」

「六波羅は炎上中だそうですよ」

「ハイ」

「この下に父の邸がごいます。ひと休みしてゆかれたら」

一代の歌人藤原俊成卿の邸が、たしかにこの近くにあるはずだ。ひとところ右京大夫もそこに身を寄せていた。

「いや、先を急ぎますので」

と資盛はことわった。

ひと休みさせるということは、この緊急事態だ。北方の身柄をそこへ托することを意味する。ほかの邸ならともかく、あそこだけは避けたい、という感情があった。右京大夫の生家だからである。

「ではおだいに旅をお続け下さい」

と、隆信は馬鹿丁寧に頭をさげた。

夫婦がゆっくりと立ち去ってゆく姿を、似絵師はいつまでも見送っている。

彼の絵心は激しく動いているはずだ。

馬上の妊婦。そのくつわを取る若い公達。

落日平家を象徴するこれ以上の画材があるだろうか。

三

疲れた。

＜北の方の疲労＞



疲労は馬上でゆられる北ノ方の肉体で著るしかった。すでになりふりをかまわなくなり、馬の首筋に身を伏せて、ぐったりとしている。それと空腹もひどかった。

これ以上進むことはできそうにない。

「あそこでひと休みしよう」

と、資盛はゆくてを見上げた。東山の裾がそこで小高く盛りあがり、松が乱生した空間に小さな建物が見えた。農夫か木樵りでも棲んでいるのだろうか。

建物の前へ駒を押し上げたとき、現れたのは鈍色の僧衣をまとった若者であった。

「病人でございます。しばらく休息したいのですが」

「それはお難儀な。どうぞこちらへ」

若い僧は嫌な顔一つしない。

「いや、ここで」

と抱きおろした北ノ方を、資盛は松の根方へ坐らせようとする。

ためらいがあった。

農夫や木樵の棲家ではなかったのだ。僧が修法する草庵ではないか。そんなところへ女人をかつぎこめない。まして身重なのである。

「かまいません。なかへおはいり下さい。お上人は差別

をなさいません」

若い僧は資盛が遠慮する意味を洞察したらしい。

「お上人とおっしゃると——」

「黒谷の法然房、源空上人の禅室でございます」

「あ、法然上人」

かねて一門の人々からこの念仏ひじりの名は幾たびか聞いたことがあった。当代稀れな徳望高い人であると。

みちびかれて、資盛夫婦は禅房へあがった。二間ばかりの簡単な部屋構えで、その奥で庵主の法然らしい人がこちらに背を向けて念仏を口ずさんでいた。

日課の念仏を終えた法然は、資盛夫婦と対座した。

名乗りをあげると、法然も資盛の名は知っていた。じきにこのきびしい現実の問題に話はすすむ。

「これから一門の方を追って西国へ落ちられるのか」

「ハイ」

「それで、北の方はどうなされる？」

「じつはどうしていいのか……」

実の母親にまで見捨てられたのである。資盛にわかる道理はない。

「お困りでしょう。わたしにおまかせなさい」

法然は、はつきりと言った。たしかにそう言ったので

ある。

「おまかせするとおっしゃると」

資盛も耳を疑ぐる。

「わたしにも今、俄かにどうするか、方法はわかりません。北ノ方を此処へおいて、あなたは一門のあとを追うのです」

「しかしこんな僧房に女人を、それも身重な身体を」

「女人であろうと、身重な方であろうと、人間に変わりはありませんまい。苦しいときは助け合わねばなりません」

理屈はそのとおりだ。しかし現実には、修法中の僧が身重な女人を引き取るなんて、考えられぬことではないか。

「そんなことをなさって、お上人の身にご迷惑が」

「生きている以上、迷惑はつねに覚悟していなければなりません」

そこで法然は弟子に命じて朝粥で夫婦をねぎらった。

「ゆっくりお食べなさい」

と、柔和な顔で箸を使いはじめた夫婦を眺めている。

空腹にこの冷えた芋粥は美味だった。贅沢三昧、これまでのどんな食事よりも美味だった。夫婦ともがつつ喰った。

「もっとゆっくり食べるのです」

と、法然は注意した。

「ハイ、つい空腹なもので」

「これが、あなた方ご夫婦の最後の食事になるかも知れないですよ」

法然はびしりと言った。

「最後の……」

「そうです。現世の交わりは、ひょっとすると、これが最後の機会かも知れません」

そのとおりだった。

一門のあとを追ひ、西国にゆけば資盛は戦争に明け暮れるはずだ。いつ落命するかも知れぬ。

翻また洛中に残る北ノ方にしても頼るべき安住の地はないのだ。どんな運命が前途に待っているか。それは誰にもわからない。

「あなた方は、お互いにこの現世で再会できると期待しない方がいいようです」

「現世では……」

「そうです。来世でめぐり遇うのです。浄土で、汚がれなき極楽浄土で必ずめぐり遇えると信ずることです」

「ああ」

「あなた方だけではない。みんながそうなんです。だか

ら阿弥陀さまはそのお慈悲の力で、みんなを再会の地、お浄土へみちびいて下さるのです」

資盛夫婦は、お互いの眼をさぐり合った。

この朝粥の席こそが今生の別れの座となるのであろうか。

いつか、どの夫婦にも必ず訪れる生別死別の座であった。

二人ともゆっくりとやわらかに芋粥を噛みしめ合った。刻限が去った。資盛は出立しなければならぬ。

と禅房の前庭で栗毛にうちまたがった。

「では、よろしくお願い申し上げます」

法然に別れの挨拶をする。

「わたしが預かるのではない。奥さんを守って下さるのは阿弥陀さまですよ」

「ハイ、阿弥陀さまです」

禅房の縁先に坐る北ノ方は、じっと夫を凝視しつづける。

声はかけず、手綱を握った手を資盛はわずかにかかげた。

栗毛は東山を下ってゆくと松の葉がぐれに若い公達のうしろ姿は小さくなった。

年 新 賀 謹

〒170 東京都豊島区西巢鴨三二〇—一 大 正 大 学 電話(〇三)九一八—七三一—代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛 教 大 学 電話(〇七五)四九一—二二四—代表	家政学園長 京都家政短期大学長 大 橋 俊 有	鎮西高等学校長 真和中・高等学校長 上 田 祐 規 熊本市九品寺三一—一
青森県弘前市新寺町一〇八 貞 昌 寺 赤 平 昌 導 (祖 畦)	稲 田 稔 界	北 川 一 有 長 寿 院 東京都台東区鳥越二—十三—十八	青森市本町一—一—十二 正 覚 寺 楠 美 知 行
蓮勝寺住職 柴 田 敏 夫	だん王法林寺 信ヶ原良文 京都・三条大橋東詰	光明寺住職 白 幡 憲 佑 横浜市南区庚台久保山	大光院住職 鈴 木 靈 海 群馬県太田市金山町

年 新 賀 謹

保元寺

里見達人

東京都台東区橋場一四七一

称名寺住職

須藤隆仙

〒040 函館市船見町一八一四
電話〇一三八二二一五七八番

中島真哉

青山梅窓院

東京都港区南青山二二八一三八

野呂幸進

川崎市川崎区小川町六番地二
教安寺

電話〇四四二二二四九四六

〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六一

清岸寺

原口徳正

華陽院

堀田良謙

静岡市鷹匠二二四一八

近龍寺住職

松濤弘道

〒328 栃木市万町二一四
電話〇二八二二二一〇八〇二

光運寺

飯田信弘

四日市市中部三十二

「浄土」購読規定

会費一力年金二、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 正月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十年十二月二十五日 印刷
昭和五十一年一月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番

年 新 賀 謹

岸 信 宏
京都市東山 知恩院

浄土宗宗務庁

浄土宗宗務支所

法主 大野法道
大本山 増上寺

大本山 光明寺
法主 石井真峯

大本山 善光寺大本願
法主 一条智光

法然上人御降誕地廿五霊場

第一番

誕生寺

岡山県久米郡久米南町里方
中国従貫道路大阪より二時間

西福寺

稲岡覚順

川口市西川口三一二四

大正大学理事長
浄土宗議會議員

栗本俊道

東京都文京区大塚五二一一〇

西信寺

誉号元祖桑原道場

宮島了道

小田原市桑原四二八

浄蓮寺

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤密雄

祐天寺

巖谷勝雄

西住院

戸川靈俊

京都市左京区黒谷町三〇